

つながり

発行元
秋田市在宅医療・介護連携センター
TEL 018-827-3636
E-mail renkei-center@acma.or.jp

令和6(2024)年
8月8日 発行

Vol.23

本誌は、医療や介護に従事する皆様が多職種に向けて自らの情報を発信し、互いに理解を深め、顔の見える関係を築くための連携ツールとして発行しております。

テーマ別特集 住み慣れた家で生活する（後編）

前編では、住み慣れた家で生活をする本人を知るためにそれぞれが意識していること、医療のかかり方などに関するお話でした。後編では情報共有や、多職種へのメッセージへと話題が移ります。



小田長 孝至 氏

株式会社かんきょう 管理者
(福祉用具専門相談員)

趣味は東北各地の温泉めぐり、
その土地の旨いもの探訪。



湊 昭策 氏

山王整形外科医院 院長
(整形外科医)

趣味はゴルフ。ゴルフ歴は50年
以上。クラブにも所属している。



佐藤 真由美 氏

秋田市医師会訪問看護ステーション
(理学療法士)

趣味は音楽鑑賞、テレビを観ること。
最近は大谷翔平選手が好き。

情報を伝える

湊氏 実は今日皆さんとここで話をしたかったことがあって、通院されている患者さんで、介護のいろいろな問題を抱えている方が結構いらっしゃいます。例えば先日、夫婦二人暮らしで、認知症の旦那さんの介護をしている方がぎっくり腰で受診されました。私は這ってもずって移動できればいいと思っていたのですが、それすらできないということで食事のことなどどうしているのか、共倒れているのではないかと心配でした。緊急で介護サービスを受けられるものなのか、施設を勧めたらいいものか、施設はすぐに入れるのか、金額はどのくらいかかるのか、介護のことはわからないのでね。この方に限らず、介護のことで患者さんにどのようなアドバイスをしてあげたらいいのか多々悩むことがあります。

小田長氏 今は高齢の二人暮らしでどちらかがどちらかを介護しているという世帯は多いですね。これからますますそういった方が増えるのかもしれませんが、そういった場合、地域包括支援センターやケアマネさんに相談していただくのがいいと思います。

湊氏 なるほど。地域包括支援センターという名前は聞いたことがありましたが…。そういった介護の情報は医師は意外と知らないのですよ。

佐藤氏 そうでしたか。目から鱗です。知っているものだとばかり思っていました。

湊氏 最近の介護サービスはどのようなものがあるか、どこにどのような相談ができるのか、連絡先も併せて情報が欲しいですね。そうすれば必要とする人に助言ができますしね。病気だけでなく生活に目を向け、患者さんと向き合うことが大切ですね。

小田長氏 先生にそのような視点を持っていただくと大変心強いです。私たち介護側も情報を発信していかないといけないですね。ですが先生方に情報を提供するとすると、私たちからすると少しハードルを感じてしまいます。情報をどのようにお伝えしたら受け取りやすいでしょうか。

湊氏 介護の職種もいろいろあるでしょうけれど、それぞれ

の役割がわからないのでね。何をやる機関や職種なのか、どのようなことを相談できるのかということをお先に簡潔に伝えてもらえるとうれしいですし、今後何かあったときに相談しやすいですね。これは市民にも同じように伝える必要があると思います。

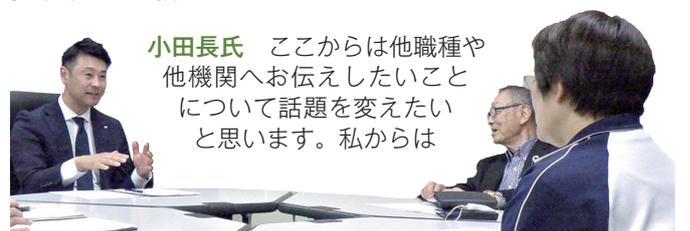
佐藤氏 そうですね。ただ実際はなかなか医師にお会いできないので、伝えられる機会が少ないのが現状です。例えば、担当者会議などの機会にも是非参加していただくと情報共有がしやすいなと思います。

湊氏 医師が診療の合間に時間を合わせて参加するのは難しいので、情報を共有するようなシステムがあってもいいかと思えますね。システムさえあれば、医師同士の情報共有も思えます。例えば、私のところに来れなくなった患者さんが在宅医療を始めるといった場合、内科の先生に担当が変わる。整形外科からは手を離れていきますよね。それでいいと思うんですけども、そんな時に情報の交換があれば内科の先生だって安心して診ていただける。骨粗しょう症がどのくらい進んでいるのか、しばらく検査していないから一度整形外科に連れて行って検査してもらおうということもできますよね。

佐藤氏 そうですよ。多職種に限らず同じ職種でも情報が入りにくいと思うので、みんなで共有すればもっと早くいろいろなことが解決するかもしれないですね。

小田長氏 関係者の中で情報を伝えるためにみんなで工夫をしていきたいですね。

多職種にお願いしたいこと



小田長氏 ここからは他職種や他機関へお伝えしたいことについて話題を変えたいと思います。私からは

ケアマネさんへ。私たちサービス提供者はケアマネさんが立てるケアプランを元に動いてますので、ケアプランの意図をしっかりと理解する必要があります。そのなかでも第3表の「主な日常生活上の活動」という欄が非常に参考になっています。ここには大まかな利用者さんの1日の生活の流れが記載されていますが、ここに担当のケアマネさんだからこそ気づく危険が潜む生活動作や自立を図りたい活動などがあると、関わるサービス提供者の方向性が一つになって、それぞれの専門性が発揮しやすいですし、それが「住み慣れた家で生活すること」につながっていくと思います。さらに不必要に高スペックな福祉用具や利用頻度が少ない箇所に福祉用具を入れずに済むので、利用者さんの経済的な負担も必ず減っていくと思います。第3表の内容が詳細に記載されてると生活環境の調整を支援していくうえで私たちも福祉用具を無駄なく、わかりやすくご提案ができるので、住み慣れた家で生活していただくためにぜひお願いしたいポイントです。



佐藤氏 要望ではないですが、病院からはいつも退院時にサマリーをいただけるので、利用者さんの疾患やADL、リハビリの内容が分かって大変助かっています。それから福祉用具専門相談員にも、お話し利用や合わないところにいるいろいろなパターンを組み替えてくださったり、すぐに柔軟に対応していただけるので助かっています。いつもありがとうございます。
湊氏 私からは皆さんにお願いです。整形外科は特にですが、受診する患者さんを第一に診ていますし、ほとんど往診もやっ

ていないので、介護のシステムや、介護サービスなどの世の中の情報を取りに行くことがなかなかできません。ですので自分の職種やそれぞれの立場がどのようなことをやっているのかアピールしてもらえるといいと思います。月に1回くらい何らかの報告をしていただくなど、そうした情報の交換もあれば患者さんの診察に役立つと思います。

小田長氏 そこは私たちが努力していかないといけないところですね。今回の感想になりますが、介護側から医療側への情報発信が量としても、質としても足りないんだなということを感じました。まずそれぞれの職種、機関がどのような働きをしてどのような役割があるのか、社会資源や介護の現状、次の一手などを、医療関係者だけでなく多職種にお伝えしていくことが大変大切だと感じました。佐藤さんは今回を通してどのように感じられましたか。

佐藤氏 そうですね。今後も在宅でなるべく元気で仲良くご家族と暮らすとか、そういった目標に少しでも力になればいいなと思いました。そのために私たちができることはいろいろあるなと思いますし、私もまだまだ至らないところもあります。それぞれの立場で思うところはあると思いますが、今回のようなお互いを理解するための取り組みが少しずつ広がっていけば、いい医療、いい介護につながると思います。

小田長氏 最後に湊先生からお願いします。

湊氏 やはり医療だけでは患者さんの生活のすべてをカバーすることはできないので、介護に関わる方と一緒にやっていかないといけないと今回改めて思いました。

小田長氏 そう言っていただけると嬉しいです。今後もよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

番外編

最新の福祉用具紹介

湊氏 ベッドから転落して受診される患者さんが多いのですが、患者さんの見守りができるように、バイタルや動きなどを関係者が見てチェックできるような福祉用具があればいいと思いますね。

小田長氏 県内の施設では実際に運用されています。施設や病院では特に夜間帯の人員が少ないので、ベッドに生体認証ができるセンサーを設置することで、呼吸、脈、睡眠の状態がわかります。他にもにおい等を検知し排泄介助に入るタイミングがわかるセンサーもあります。マットレスの下に敷くだけで身体には何も装着しないので、利用者さんへの負担を与えることなく見守りができます。計測されたデータは、リアルタイムでパソコンやスマートフォンのアプリから確認できるようになります。

佐藤氏 それぞれの状態が一目で見えると、小さな変化にも



眠りSCAN (パラマウントベッド)
 マットレスの下に敷いて体動(寝返り、呼吸、心拍など)を検出して、睡眠状態を測定できます。

早く気付けるようになりますし、夜間も利用者さんに負担をかけることなく介助できそうですね。施設だけでなく在宅にまで広がってくると、関わる専門職で共通の認識を持つことができているですね。

湊氏 これは災害時にも役立つかもしれませんね。

小田長氏 うまく活用することで、関係者間での情報共有の仕組みづくりにも貢献できるのではないのでしょうか。他にも、人工衛星から高精度な位置情報を把握して認知症患者さんの見守りに活用する徘徊感知機器といったものなど、最新の技術を活用して新しい福祉用具が次々と開発されていますし、使い勝手も改良されています。これらは介護保険の保険内で利用できるものなので、こういったものがあるということを知っておいていただければいいと思います。ご希望があればお気軽に福祉用具専門相談員にご相談ください。



iTSUMO3 (アーバンテック)
 2つのブザーが離れることで(ドアの外に出るなど)音が鳴ってお知らせする徘徊感知機器です。

秋田市在宅医療・介護連携センター

〈受付時間〉月～金(祝日を除く)午前9時～午後5時
 〒010-0976 秋田市八橋南一丁目8番5号(秋田市医師会館2F)
 TEL:018-827-3636 FAX:018-827-3614
 E-mail renkei-center@acma.or.jp



編集後記

見た目に配慮したものや痒いところに手が届くような福祉用具を拝見し、新しい介護の形を感じました。使う側も進歩していかないといけないですね。 渡邊

